

猫に寄生するダニの種類・症状・原因とは？ マダニ駆除の決定版をご紹介します！

猫が悩まされる猫ダニの種類・症状・原因を知り、特に厄介なマダニを駆除するための予防対策や、おすすめの駆除薬についてお伝えしていきます。



猫に寄生するダニの種類とは？

①マダニ

マダニは体長3～8mmほどの大きさで、吸血をして飽血状態になると1～2cmほどの大きさになることもあります。春から秋にかけて活動が発化しますが、温暖な気候であれば冬でも活動し、室内環境であれば年中みられることもあります。地上1m程度の高さの植物に付着し、葉陰で猫をはじめとする動物や人間を待ち伏せ、皮膚に噛み付いた後、セメント物質を分泌して固着します。猫だけでなく、犬などの他のペットや人間にも危害が及び、深刻な病気の媒介・原因にもなる場合があるため、非常に厄介です。

②ヒゼンダニ

ヒゼンダニは体長が約400μm(マイクロメートル)・体幅が約325μmで、肉眼ではほぼ見えにくい程度の大きさのダニです。「疥癬」と呼ばれる激しいかゆみを伴う皮膚病の媒介・原因になることがあります。特に、猫の多頭飼育をしている場合は、1頭がヒゼンダニに感染すると、あっという間に寄生が広がることもあり、注意が必要です。

③ミミヒゼンダニ

ミミヒゼンダニは、その名の通り耳に寄生するダニで、耳介から鼓膜までの間にある外耳道に寄生します。そして、「耳疥癬(みみかいせん)」や「耳ダニ症」と呼ばれる感染症を引き起こす場合があります。

④ツメダニ

ツメダニにはいくつかの種類がありますが、猫に寄生するダニとして代表的なネコツメダニは、体長0.4～0.5mm程度の大きさで、頭部に大きなカギ爪を持っているのが特徴です。このダニが猫に感染すると、「ツメダニ症」と呼ばれる大量のフケと軽度のかゆみをもたらす症状を引き起こす場合があります。人間が刺されると強い痛み・かゆみを感じる「ダニ刺咬性皮膚炎」になることもあります。

猫に寄生するマダニがもたらす症状とは？人間にも危害が及ぶ

マダニは猫だけでなく人間にも危害を及ぼすほか、命の危険があるような感染症の媒介・原因にもなるので、早期の駆除が必要となります。

①SFTS(重症熱性血小板減少症候群) ※人間にも症例あり

マダニが媒介する危険なウイルス感染症に、SFTS(重症熱性血小板減少症候群)が挙げられます。猫や犬のような動物以外に、マダニを介して人間も感染する場合があります。発熱・嘔吐・下痢・倦怠感などの症状がみられ、重篤な場合は死亡例もあります。近年、特に猫で重篤な症状を示すことがわかってきており、猫での死亡率は非常に高く50～70%とされています。現在、特効薬はありませんので、できるだけ速効性のあるマダニ駆除対策が重要です。

②ライム症 ※人間にも症例あり

ライム症は、マダニが媒介するボレリアと呼ばれる細菌の一種が引き起こす感染症です。猫や犬のような動物以外に、マダニを介して人間も感染する場合があります。発熱・悪寒・筋肉痛・頭痛・関節痛・倦怠感など、インフルエンザのような症状がみられます。その他、悪化すると神経症状・皮膚症状・眼症状・関節炎・筋肉炎・心疾患などの症状が出る場合もあります。

③猫ヘモプラズマ感染症 ※主に猫にみられる症例

マダニやノミなどの咬傷を通じて、猫ヘモプラズマ感染症の病原体が猫の赤血球に感染すると、赤血球が破壊され、貧血症状を引き起こします。発熱・食欲不振・脱水症状・貧血による可視粘膜蒼白・脾臓の肥大化などの症状がみられることもあります。

猫に寄生するマダニを予防・対策・駆除するための方法やお薬とは？

①日頃のブラッシングケアを欠かさない

マダニのような肉眼で確認できる寄生虫は、日頃から猫のブラッシングケアをすることによって、早期に個体や症状を発見することができ、予防・対策につながります。

②動物病院で処方されるマダニ駆除薬を使用する

猫のマダニ駆除の方法として、最もおすすめしたいのが動物病院で処方されるマダニ駆除薬を使用することです。現在、猫のマダニ駆除薬として主流なのは、猫の体に薬剤を垂らして使用するスポットタイプです。首筋に塗布するため、グルーミングによって猫が舐めとってしまう危険性も少なく、効果も長持ちします。

ノミ・マダニに関する最新情報をチェック！

📍 LINE 公式サイト LINE@友達募集中 →

